217

# きびのさと

NO.78

月刊

昭和廿九年十二月一日 毎月一日発行 （非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町三五字垣内
吉備観光協会 呼電四三七番

第二輯 社寺篇 第一号

## ○ 新宮社祉

庭瀬から板倉へ通ずる街道の東、約二百米ばかり隔てて殆んど併行して吉備津へ行く田圃道がある。この道を辿って東山地内へ入ると、右側に石の大華表があって、その傍に「吉備津 新宮社 是より三町」と刻んだ地上高さ三米、幅〇、三米の道標がある。中程から二つに折れているが、ここから華表を潜って松並木の馬場を進んでゆくと、左側の松樹の間に石地蔵尊が建っている。その台石に「月明院善光信士 自性院妙光信女 法雲妙紫信女、法界萬霊 施主 道瞻妙生」の文字が読まれるが、年号は見当らない。その左に高さ二米ばかりの自然石の表面を平らに削り「南無阿弥陀佛」「貞享四丁天七月十五日」「東山村願主念佛講」と刻んでいる。この東山村は往時の田稙にして村民中の信者が建立したものである。東山の地名は足守川を隔てた真西に当る庄村の日畑西組地内の高地を西山という地名に対して呼ばれた名である。

この松並木を通り抜けた所が東山の部落である。ここから竹藪に覆われた参道を辿り数階の礎道を踏むと新宮社祉に至る。左隣りに見える寺院が天台宗真如院である。石段の途中の左側に手洗石がある。その銘に「奉寄進 弘化三歳丙午正月吉日」「有松傳右エ門 岡田徳蔵 同吉蔵 大内屋惣右エ門 中山勘兵衛 同清太郎」とある。



境内は雑木林に包まれた山腹にして横四、七五米、縦二、八五米の石がき土台の中央に高さ五一糎の台石の上に、高さ一、九二米の石碑をたてている。碑文に表面に「吉備武彦命鎮座跡也」と大書し、裏面に「元村社新宮社御祭神ハ吉備津神社摂社本宮社御祭神ノ曾孫ニ坐シ御由緒上離シ難カラサル御関係ヲ有セリ為ニ往古ヨリ絶エス本社ヨリ幣帛ヲ奉リ奉祀セルニ偶合祀ノ命令ニ接シタルヲ以テ再三熟議シ上記新宮社ヲ本宮社ニ合祀シ益々財産ノ基礎ヲ鞏固ニ」「当時ノ祭祀ヲ享クセンカタメ明治四十二年八月五日其筋ヘ出願同四十三年二月廿六日許可ヲ得遂ニ同年三月十六日盛大ナル合祀祭ヲ執行シタリ依テ碑ヲ建立シ聊カ顕末ヲ記シ後年ノ記録ニ資ス云爾

大正四年十一月吉辰 宮幣中社 吉備津神社 編宣 藤井恭之助 謹書

と刻んでいる。いうまでもなくもと孝霊天皇の曾孫に当る吉備武彦命を奉祀していた新宮社の舊祉である。

右手の山中に木野山神社祉、稲荷神社祉としたいさな石標がたてられている。左に接して蒙師如来を祭祀する社がある。この社はもと十五六間離れた山中に昔からあった古社であるが、新宮社の遷祀で現地に移して東山部落の鎮守にしたのである。御本尊の蒙師如来は高さ二尺五寸、西わきに月光、日光の二菩薩を配している。其後本殿の屋根が甚だしく損傷したので、昭和三十九年五月に修繕のため一時御尊体を真如院に下遷したが漸く竣工したので、同年六月十四日の夜半上遷式を行ったのである。（薬師如来の佛像は、左手に薬つぼをのせ、右手は肘をまげて手の掌を前面にあらわし、顔は慈悲と理知を兼ね備えた崇高な姿である。古くから衆生の病気を救い法樂を与えて衆生に徳を施す、ほとけ様といわれる。世の中が複雑でない時代には病気だけが民衆の大敵であったから蔵

民は信仰が厚く、お薬師さまとして親まれてきた。故に大医王仏という別名もある。仏像には大別して如来、菩薩、明王、天の四種類がある。そのうち如来は最高といわれる」。）

我国の最古の文献である古事記に、吉備地方に派遣された孝霊天皇の皇子、吉備津彦命、稚武吉備津彦命の御子、御鉏友耳建日子命の御子である。

吉備武彦命は武勇の誉れ高い日本武尊の従像にあたり、日本武尊が勅命によって東北地方に向はれた時、吉備武彦命は大伴武日連らと共にその軍に従うて武功をあらわされた。命はまた遠く越後ノ国の動静を探ぐるために出発せられた。日本武尊が信濃ノ国を帰朝されて尾張に帰りハ更に近江ノ国へ却かれたが、陣中で微かに病に罹り漸く尾張の能褒野に戻って世歳で薨じ給うたのである。命は遺命を奉じて大和へのぼり朝廷にその由を奏した。命の薨じ給うたことについては文献にみえず御陵墓の確定したものはない。一説には岡山市北方の神宮寺陵をさすものがあるが、何等信據のある説でもない。

吉備津彦命には安嗣はなく弟の稚武吉備津彦命が後裔が吉備氏族にして、この地方に繁衍したのである。吉備氏の系統は（第九期系譜篇参照）稲日大郎姫命の姉妹が景行天皇の宮に入り、武は吉備穴戸武姫命が日本武尊の妃となるなど当時吉備氏は皇室の外戚になり栄えたが、雄略天皇の七年（四六二）吉備下道臣前津屋というものが勅使の吉備弟前部黒宝を押留し、天皇に殺いたので天皇は物部氏の兵士三十八人を遣わして前津屋とその族人七十人を殺さしめ給うた。また吉備上道臣田狭の妻は同じ吉備氏の出にして窪屋臣の女であるが、稚姫といい容姿端麗なので天皇はこれを寵愛し田狭を三韓の任那の国司に任じ稚姫を召して宮に入れ、愛妾、皇川の二皇子をもうけた。

田狭はこれを聞いて怒り新羅の国と通じて任那の日本府で叛旗をあげた。天皇は大いに驚き給い、田狭の子の弟君と吉備海部直ノ赤尾に詔して三韓に渡り先ず新羅を征せられた。田狭は使を遣わして弟君を招いたので、弟君の妻樟姫は夫の異心のあることを察してこれを殺して帰国した。日本書紀にはこれを書して「国家ノ情ハ深ク君臣ノ義ハ切ナリ。走ハ白日ニ蹈ム、節ハ青松ニ冠タリ」とある。樟姫は大義のためにその夫を滅ぼしたのである。天皇の末年に二皇子が叛するに及んで上道臣の一族はこれに應じて舟師四十隻を率いて東上したが、途中で皇子の死を聞いて軍を帰したことがある前津屋、田狭の叛がありてから吉備氏の勢力は次第に衰え、吉備小梨及び吉備屋代らが三韓に武名を輝かしたことがあり、また後ちの奈良朝期に上道臣斐太部が橘奈良麻呂の叛を密告した功によって備前ノ国造に任せられ、また下道臣吉備真備が右大臣になったこともあるが、子孫は其後の国史にあらわれるような人物は出なかったのである。

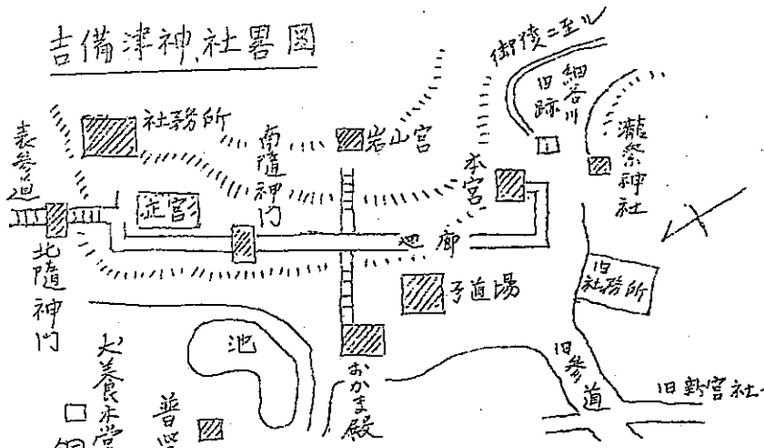
△ 社咫の碑の傍に「木野山神社　稲荷神社　吉備武彦神　三室荒神　豊受比売神　遥拝所」とした石碑がたてられている。いづれも吉備津神社へ遷祀した神々の名である。

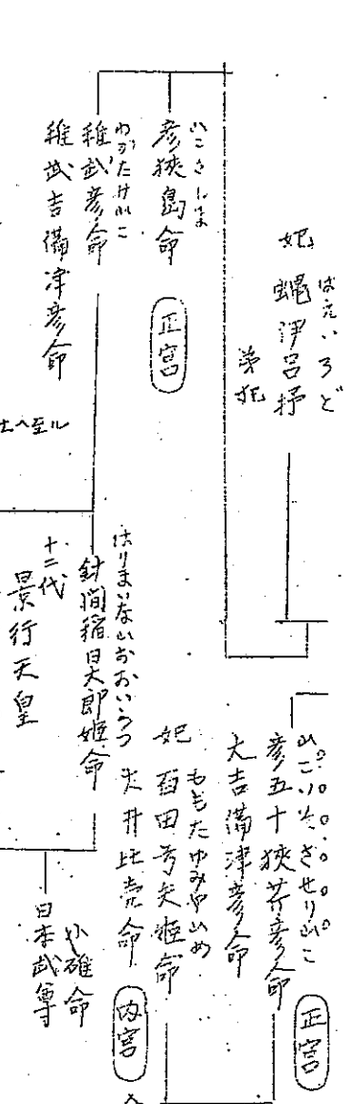
来山部落の氏神の秋祭りは恒例によって「吉備武彦神社」と墓地に白字で染め抜いた幟りをたてて祭り村民は十月一日働らかずして吉備津神社の本宮まで参拝するのである。

豊受比売神というは伊弉諾命の孫にして稲作、養蚕の神、農業の基礎をつくられた神で、伊勢神宮の外宮にかしづき奉る。もと丹波国奥宮丹にあったが、雄略天皇の御代に伊勢国へ遷祀したのである。三室荒神というは、最初仏教でいう夜叉、羅刹などの悪神を祭るものである。この神は古来から最も人間の不浄を忌む處から清浄にして不浄を遠却することに結びつけて、江戸時代からかまどの神として各家毎の台所に祭るようになったのである。三室とは昔僧侶の尊称語で、これを上部につけて崇めたのである。

△ 吉備津宮の古図によると、ソまの吉備津の廻廊は本宮の處から連接してこの新宮社まで山腹を縫うて五町ばかりも続いていたが、文正十年羽柴方の軍勢が日畑城攻撃の時に銃砲を備えたので破損箇所が出来たが、修理することなくついに取除いたという説があ

## 吉備津神社略図




○

吉備津神社に奉祀する祭神の系統について参考に記述してみると

倭迹々日百襲姫命 正宮

日子刺肩別命 正宮

孝霊天皇

七日市媛子彦太瓊命 本宮

倭国香媛

七代 孝霊天皇

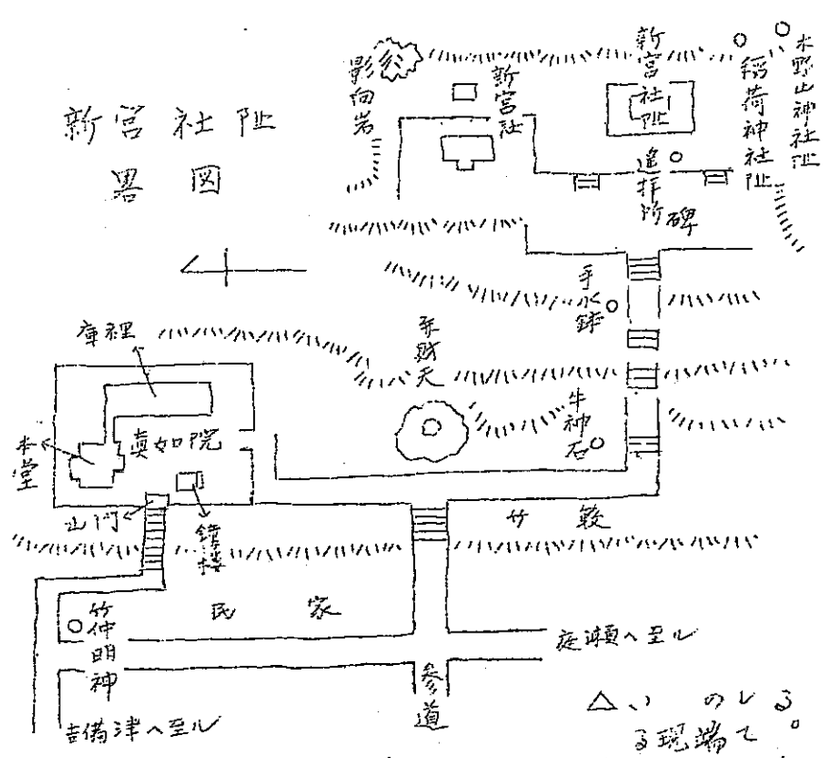
○

があった。これは山上に棲む大蛇の怒りによるものだと言い傳へられ、ついにこの地に瓦焼の祠をたてて祭ったという。竹仲は犬の長い怪物の意から轉じたという。人家とても稀れで、道ゆく人々が往々毒気に触れたようになって倒れるものもあった。

○

眞如院に入る道端に一小祠がある。俗に竹仲明神といっている。東山部落の有志のものが祭祀しているが、いかなる神を祭っているのか知る人はない。昔この辺りから眞如院のわきまで樹木の繁ったあたりがつづいていた寂しい山村であった。

## 新宮社祉略図




△

昔吉備津宮の五所明神といわれ、参詣者が巡拝していたのは、正宮、岩山宮、本宮、内宮、新宮を指すのであるが、いまでは新宮、内宮とも本宮に合祀されているのである。

因に内宮は吉備津彦命の妃、吉備大井比売命を祭祀する宮で、もと吉備津御陵への参道途中の西手の尾根にあった。そのあとには新宮社祉と同じように内宮社祉の記念碑がたてられている。

今は正宮から本宮に至る百六十間程が現存している。今の南隨神門はもと廻廊の南、東山の端にあったものを、後世ここに移したという。現にそのあとには廻廊の残礎が諸々に遺っている。

建日方別命

（神佐の者将にして吉備の中山の地神）

○ 沖田宮祠

撫川の狭川一九二番地森川正一の屋敷にある。南向にして間口三尺、奥行五尺の瓦葺屋根の堂のうちに高さ一尺五寸程の石造の祠を安置している。

祭神は阿喜多女である。この阿喜多女は昔池田藩が見島湾干拓の工事に、海中に築堤を誤けて汐止を施したが、幾度となく崩壊し人力の術もなく、つゝに人柱をいれて新く雄工事が竣成したと、う。その人柱の犠牲になつて選ばれたのが、この女である。

後世阿喜多女の屋敷であつたこゝに一小祠をたてその霊を祭つたと、う言い伝えとれている。もとよりその真偽は不明であるが伝説として遺つている（第十輯伝説篇参照）

○ 稲荷宮

本町の南堀端筋に面した藤田氏の屋敷裏にある。宮は三尺四面の流造本瓦葺屋根にして内陣に瓦焼の祠を納めている。祭神はいうまでもなく正一位稲荷大明神である。

傍に縦一尺三寸、横三寸五分の棟札がある。銘に

文政九歳　　大工　平治郎
奉建立御本社一宇　発起人　藤川吉郎
　　岡本氏別当　中尾藤左衛門
戊三月上旬　　本願　世話人　武南嘉兵衛
　　三船吉左エ門
　　伊丹元右衛門
　　矢尾園之助
　　神樂　きくの

縁起については詳でないが、文政九年の棟札によつてこの時代に勧請したことは確実である。道路に面していることと、世話人が連署してあることは、一屋敷の鎮守ではない、藩政時代には船着場として物資の交易に舟の出入も繁く栄えていた處なので、部落のための鎮守ではなかつたかと思われる。藤田氏は明治の末期この屋敷を譲り受けてきた人であるが、近年まで藤田氏個人にて毎歳祭事を行つていたが、いまは絶えたということである。（第七輯　人物篇　参照）

○ 水野山宮

関戸の六間川樋門の傍に十坪ばかりの社地を割した三尺四面の一小祠である。祭る所は大山祇命と大巳貴命の二柱である。内陣は二室にわかれ左には高さ十五糎、極彩色の衣冠束帯の坐像を安置しているが、右にはなにもない。もと同様に二つの神像が納められていた筈だが、盗難にかかつたものと考えられる。しかし現在の坐像が、どちらの祭神に対する尊影かは知る由もない。宮の左に台石を有する高さ一二五糎、上部の尖つた自然石に「牛頭天王」と刻んだ石碑がある。右にはこれと同形の自然石に「埴夜須毘古神」の三神を刻んでいる石碑がたてられている。また埴夜須毘売神　彌都波能毘売神」また南寄りに高さ二米ばかりの石地蔵尊がある。台石に「法界」「明治廿六年七月廿三日建立　為水死群霊菩提焉　世話方　関戸　妹尾崎　信者中　発起人　庄村下庄平松源吉」と刻んでいる。これは明治廿六年の夏、大洪水のため足守川が氾濫し水死した村民たちの冥福を祈るために建てられたものである。

この地蔵尊の北に自然石を積み重ねた四米ばかりの石灯籠がある。軸部に「奉燈　明治五年壬申十月造立之」の銘がある。

この宮は高梁市今津に鎮座する水野山神社と同一神にして、その分霊を勧請したことは云うまでもない。大山祇神と申すは我国を経営された神代に遡る伊弉耶岐、伊弉耶美命の子にして富士山麓にある浅間神社の祭神木花開耶姫命の御父にあたり山を支配された神といわれている。愛媛県越智郡大三島の大山祇神社もこの神を祭祀している。

大巳貴命は水野山神社の相殿に祀られている神で、出雲大社の祭神大国主命の別名である。この神は太古秋国を開発された大地主神といわれている。神代七代神産巣日命の子、少名彦命と共に国土経営に努められ、家畜、医薬の術、鳥獣昆虫などの災害をはら

禁厭の術を伝へられたので後世悪疫が流行すると、この神を祭つて平癒祈願をする習慣がある。

明治の初年に四国、中国地方一帯に疫病が蔓延し猖獗を極めたことがある。この時木野山神社の分靈を乞ふて祭祀する部落が多く、また神社の靈水を病人に飲ませば靈験があると伝へられ各地方から団体で参拝し四斗樽をかつぎ合つて靈水を乞ひ持ち帰つたという。こうした動機にこの宮も分靈を勧請して部落の安泰を祈つたものである。

庄勝の石碑に刻まれている三神は「古事記」によると、伊弉那岐、伊弉那美命の御子にして大山祇命は異母兄に当るのである。また牛頭天王については前にも述べたが、大国主命の先祖である素盞嗚命の別名でこの神も疫病の神と崇められ各地にある祇園宮の祭神である。牛頭とは佛語から出た尊名である。

伝染病が始めて我国に流行した文献のみえるのは日本書紀巻十九の欽明天皇の條である。それによると欽明天皇の十三年（五五二）の冬十月に百済から佛像、経論を献じた時、天皇は群臣にはかられた。蘇我稲目は信ずることを奏し、物部尾輿は我国には天地社稷の百八十神を祭拝している、今改めて蕃神を拝むことは国神の怒りを召くと奏した。そこで天皇はまどわれ佛像と経論を稲目に授けられた。間もなく疫気が起り多くの民がかかつたが治療する術も知らず病死するものが続出した。尾輿はさきに奏した計を用いずして、佛教を信仰したので起つた奇病であるとして、佛像を難波（大阪）の堀江になげ棄て伽藍を悉く焼燼した。（この佛像は後ち信濃の本多善光という人が拾いあげて、いま信濃の国善光寺の本尊となつている我国最古の佛像といわれている）この時の疫病がコレラか赤痢か不明であるが、吾々の最も恐怖するコレラが流行したのは文政五年（一八二二）とされている。発源地は判然しなかつたが南方から侵入し、九州から中国、近畿一帯にいろがつたことがある。「日本疫病史」によると「その症状劇烈にして医、俗とも皆て見ざるところ奇病なりしが故に、対馬にては見急と名づけ芸州にては「コロリ」、豊後にては鈴砲、浪華（大阪）にては三日「コロリ」と名づけたり。と書いている。この病は沼津あたりにて止まり終熄した（四暦十月下旬）。これから三十六年を経て安政五年（一八五八）に再び大流行し、前回よりも猖獗を極めた。同書に「安政五年六月肥前崎陽暴瀉流行し、西国を経て浪華、京師に及び、七月江戸に流行す。其病に伝染するもの箭を射る如く、即時目陷り、鼻尖り忽ち鬼籍に上る者、男女係せて武家二万二千五百五十四人、町家一万八千六百八十人と云ふ」。とある。それから四年后の文久二年にも流行した。「死に至るもの先般の流行に比すれば其数倍なるを知らず。世がために全家悉く死亡し嗣を絶やし、産を失ふもの挙げて数ふべからず」。と恐しいことを詳しく書いている。また当時の善府の著わした「疫毒予防説」という書物には「これ天地間に行わるるところの一種の厲気（やくびようがみ）に感じて起るものにして気運の変により鬱蒸して發したる一種の疫症なり」。と述べている。医術も進歩しておらず、医家でさえ一様にその原因は悪神の霊に触れて怒りを發するもののように考られていたので、庶民たちはさかんに疫神を祭り敬虔な祈念を捧げて平癒を願つたのである。（おわり）この項未完



プロパンガス
ガス器具
石油類
各種燃料
備前瓦斯燃料吉備営業所
電話吉備局六三〇九番
有線二七〇三番
岡山市北長瀬
電話㊁〇五一一番

吉備タクシー
タクシーの御用命は
山陽線庭瀬駅前
電話吉備局 58 310 350 番
有線 1901 番